

## 危険ドラッグ

# 構造や作用解明へ

岐阜市立岐阜薬科大と県保健環境研究所は9日、危険ドラッグが体内に及ぼす作用を解明する研究を新年度から始めると発表した。化学構造の変化で規制逃れを繰り返す危険ドラッグの構造と作用の特徴をデータベース化し、血液や尿などから簡単に薬物を検出する技術の開発を目指す。

危険ドラッグに対し、国は医薬品

## 岐阜薬科大と 県保健環境研

医療機器法(旧薬事法)に基づいて薬物に含まれる化学物質を鑑定し、体に有害であれば「指定薬物」として規制している。現在、1400種余りが指定されているが、規制されると、似た化学構造の新たな薬物が出るといったたちごっこが続いている。

そこで、同大が持つ薬物合成や薬効解析などの研究技術を使い、指定

薬物の作用や構造の解明に乗り出す。具体的には、構造が似た薬物をいくつかのグループに分け、各グループの代表的な化学物質について体内でどのように作用しているかを解明し、データベースにする。

また、どの化学物質が体内に残りやすいかなどを研究し、危険ドラッグの使用を血液や尿などから識別できる検出技術も開発する。

原英彰副学長は「薬物が体の中で何を起こしているのかを創薬の技術で分析し、危険ドラッグの蔓延を抑えるきっかけにしたい」としている。